

堰を切るように溢れ出す数々のアイデア、夢に終わらせずに

ジャーナリズム分野博士課程 松田 美恵子

音が一つ一つなくなっていく感覚。身の安全のために聞こえないことを隠さねばならなかった辛さ。さらに、聞こえないことを長い年月かけて受け入れていく過程。どれをとっても耐えがたい体験です。それらを経て、堰を切るように溢れ出す数々のアイデア。

東京ディズニーランドでの手話パフォーマンス、銀座和光の手話ショーウィンドー、誰もがあっという間にいいなーと思う夢ですが、夢に終わらせず実現させてしまう。ない方がおかしい、という発想で。

最後の方が質問された！ITテクノロジーについては、私も思い当たる経験があります。

10年前に、聴覚障害の女性と一緒に仕事をしました。電話ができず、筆談か読唇でコミュニケーション（周りの人間は誰も手話できず）、という彼女の状況で何の仕事をやってもらおうか考えました。ちょうどインターネット普及期で、電話や葉書で来ていた苦情が、メールで来るようになっていました。そこで彼女にクレームを受け付け、他部署へ回したり、集計や分析をする仕事を任せることにしました。また社内メールも普及し、複雑な調整や交渉ができるようになりました。仕事の幅がグーンと広がりました。

ただし、係内の会議など、複数の人が一度に話す場では、読唇もままならず、彼女は排除されてしまいます。そのため、会議に手話通訳を入れ、発言するときは一人ずつ、というルールを作りました。手話通訳さんの予算をとるのに、必要性をわかってもらえず苦労しました。唇を読むためには、相手の唇の動きが見える位置に立つこと、複数の人の唇の動きは捉えられないこと、という当然のことが、皆わかっていなかったのです。

当時と比べれば、今はパソコン文字通訳のシステムなどコミュニケーションツールは格段に進んでいます。でも、技術があっても、使う人の側にたった必要性が理解されなければ実現しません。私の上司は、彼女のために災害時の表示灯をつけようとしたのですが、これは実現しませんでした。羽田空港で実現しているのは、すごい！

この3月に、別のシンポジウムで、字幕をつける運動（特にDVDに）をされている方の話を聞く機会がありました。一人で企業へ依頼をしていたが、同じ要望をされている人が多いことを後に知り、ツイッターで展開しているとのこと。松森さんの草分け的活動が広がっているのですね。

“世の中は不合理なことが多い。あきらめなければならないこともある、しかし生きることをあきらめてはいけない。”・・・涙が出ました。

障害者の方を理解することが難しい、というよりも、どこかで心の中で壁や言い訳を作ってしまう自分、に気づきます。松森さんの柔軟な発想、人を引きつけるお話しぶりにも感心しました。ありがとうございました。

私は、自分の数少ない聴覚障害者の方との出会いを通じて、聴覚障害の方はきれいな人が多い（かつ表情豊か）、②言葉に対する感覚が鋭い（文章がうまい）、付け加えるなら ③親ごさんが素晴らしい、という先入観を持っていました。今回もその観を強めたのでした。